
ネギまin坊っちゃん

緋翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま in 坊っちゃん

【Nコード】

N5378N

【作者名】

緋翠

【あらすじ】

坊っちゃんがネギまの世界に入っちゃった？

「リオン大丈夫か？」

「大丈夫だ！エヴァ」

「なら良いが」

『僕は空気ですか？』

「……居たのかシャル」

『うわあああん坊っちゃんのバカアアア!!』

設定（前書き）

まあ坊っちゃんの説明ッス

設定

名前

リオン マグナス

偽名

ジューダス

TOD2の物語が終わってから麻帆良学園にトリップしてきた。

なぜか麻帆良学園はシャルティエも一緒に飛ばされていたので武器はシャルティエ。

外見はジューダスの仮面無しのまま。入学後の普段着はカジュアルな黒の服

使用出来る晶術はTOD D2のを共通で使える。

技も同じ

始動キー

シャル・シエル・シャルティエ・シエルシエラ

適用属性 闇、光

相反する二つの属性が得意。

ネギよりも先にエヴァに弟子入りしている。

この世界の魔法を学び始めたのは、エヴァに声をかけられたため。

晶術が使えるのでなかなか早くマスターする。

発動体は指輪。

中に持ってきたレンズが入っているため、シャルがいなくても晶術が使える。

しかしこのレンズではTOD2の晶術しか使えない。

プロローグ（前書き）

他に書いている小説でもやっているキャラクター名言！

言って欲しい

こんなセリフあるよ

なんて方が居たらそのキャラクターの名前、作品、名言を教えてください

書きます

ってな訳で今日の名言

例えば何度生まれ変わっても必ず同じ道を選ぶ！！

《TODリオン・マグナス》

お前こんなこと言ってたのか？

《聴き手エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル》

ええ、確かに言っていましたよ

《リオンの相棒（可哀想な）シャルティエ》

プロローグ

次元の狭間

ロニとカイル達の前から消えた後、

（僕はどうなるんだ。このままりオンとして消えるのかジューダスとして漂うのか？）

（まあどちらでもいいか。歴史は元に戻したんだ。これでスタンも生きているだろう。）

（なんだ？あんな所に光が？）

（行っって見るか？）

そして歩いて近づくと、

急に光がリオンを包み込む。

（なんだこれは？）

そして光が消えた時リオンはそこにいなかった。

麻帆良学園 夜

ピカッ

光が落ちてきた。

「？ なんだ行って見るか？」

一人の長い刀を背負った女の子がいた。

光が落ちてきた場所に向かうと。

一人の綺麗な男の子がいた。

（年は私寄りちょっと上だろう。）

「怪しい奴だし。武器を持っている。学園長に報告しに行くか？」

少女は男の子を担ぎ上げ学園長室に向かった。

学園長室

「と、言う訳なので連れて来ました。」

少女は学園長に説明をした。

「フオフオ、ご苦労じゃったのう刹那くん。後はこの人が目覚めたら話を聞いてみるとするかのう。」

頭の長い老人は答えた。

「しかし何なんでしょうかね？ 学園結界も反応しなかったんですよ？」

メガネをかけた背の高いおじさんが言った

「高畑先生、大丈夫じゃよ。明日からはネギくんがくる。もしものが起こる前に捕まえたんじゃないよ。何も無いよ。」

メガネの人高畑にそう言った時

「うっ！（ここはどこだ。）」

目を覚ました。

「学園長目を覚ましました。」

刹那がそう言っ て学園長に知らせる

「ここは、どこだ。」

「ここは麻帆良学園じゃ。きみにいくつか聞きたい事がある。」

「なんだ？」

「きみは何者かね？なぜ学園結界の中に入れたんじゃ？」

「知らん。目が覚めたらここにいた。」

「ふむ、嘘は言っていないようじゃ。では名前は？」

「ジューダスだ。」

そう言つと学園長は目を細め

「それは偽名じゃろう？本当の名前は？」

そう言ってきた

「チッ！ リオン、リオン・マグナスだ。」

「そうか。」

「驚かないのか？」

僕はスタン達を裏切った者だから何か言われると思ったんだが

「なぜ驚くんじゃ？」

「僕は世界の裏切り者だぞ。」

「なんじゃって？そんな話し聞いた事ないがのう。」

「なっ、ここはどこだ。」

「ここは日本の麻帆良学園じゃ。」

「まさか、別世界か？」

「ふむ、聞いている限りそうだろう。ここはきみがいた場所とは違う世界じゃ。」

「そうか。」

「あまり慌てんのう？」

「向こうの世界に未練はない。」

「ふむ、なら学園に通ってもらおう。この世界の事は何も知らないのじゃろう。」

「わかった。ありがたい。」

「ちょっと待ってください。どこのクラスに入れる気ですか？」

「それはのう高畑先生、2ーAじゃ。」

「なっ、彼は男の子ですよ。」

刹那が言う。

「あのクラスはそうゆう子が多いクラスじゃ。それに馴染みやすいじゃろう。」

そう言われて刹那は黙った。

「では、明日から新しい生活をしてもらう。」

「すむ場所は？」

「刹那くんと一緒に部屋じゃ。」

「なっ、学園長！」

「きみには彼の見張りをしてもらう。これならいいじゃろう。」

「分かりました。行くぞ。」

そう言われてリオン達は出ていった。

刹那の部屋

「ただいま龍宮」

「お帰り刹那、誰だきみは？」

「今日から一緒にすむことになったリオンだよろしく頼む」

そう言つて刹那に説明を任せ部屋の奥に入つて行く。

（今日から新しい生活が始まるのか。少し楽しむか。）

次の日

刹那が目を覚ますと、いいにおいが漂っていた。

（龍宮が料理しているのか？）

しかし下の布団を見ると龍宮はまだ寝ていた。

（じゃあ誰が？）

布団から起きキッチンに向かうと昨日一緒に住むことになった奴が料理している。

「む、起きたのか？」

声をかけてきた。

「ああ、何しているんだ？」

「見ての通り、朝食の準備だが？」

「なぜあなたがやっているのか聞いているんだ。」

「一番に目が覚めたから。」

「そうか」

「ほら、できたぞ。龍宮と言ったか？そいつも起こせ。」

「あ、ああ。」

「龍宮起きろ。ご飯だぞ。」

「誰が作ったんだ。」

「リオンだ。」

そう言って起きる龍宮

「「「いただきます。」」」

そう言って朝食を三人で食べた。意外にも美味しかった。

そしてまた刹那はリオンを連れて学園長室に向かった。

初めて会つやつら（前書き）

今日の名言

俺は君だけの英雄になるよ！

《TOD2天然主人公カイル・デユナミス》

お前の仲間はなんと言つかあれだな……

《またしても聴き手エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル》

言つな

《我等が坊っちゃんリオン・マグナス》

初めて会うやつら

学園長室に行くと、子供に会った。それにツインテールの女にロングのストレートの女にも会った。

その後学園長に制服と生活費をもらい着替えて子供の後について行く。

子供の名前はネギと言つらしい。

あつ、後忘れてたけどシャルティエを学園長から返してもらった。

『坊っちゃんひどい!』

どうやら一緒に来たらしい。

しかしこの世界の人には魔力がある奴には聞こえるらしい。全くやっかいだ。

まあだがこれで晶術が使える。

そんな事を考えているうちに教室の前に着いた。

ネギが先に入り、トラップに引っ掛かり皆に心配されている。

自己紹介がすんだらしい。
名前が呼ばれた。

「シャル喋るなよ。」

『分かってますよ坊っちゃん、ほら入りましょう。』

そう言って教室に入った。

僕が入った瞬間騒がしかった部屋が静かになる。

次の瞬間！

「「「「「キヤー、カッコいい。「「「「「

教室の中はうるさくなる。

そして落ち着いたところで

「僕の名前はリオン・マグナスだ。よろしく頼む。」

それだけ言って僕自分の席に向かった。

隣は刹那がいた。

「よろしく。」

刹那がそう言ってきた

「ああよろしく。」

それからクラスから質問攻めに会ったがそのお陰でクラス全員の名前を覚えた。

さらに歓迎会もありなかなか楽しかった。

そうして1日目が終わった。夜

刹那達と一緒に見廻りをした。

「リオンなかなか人気者だったな。」

龍宮がそう言ってきた。

「お陰で疲れた。」

刹那が

「そういえばリオンの実力を知らないな。強いのか？」

「向こうの世界では強い方だな。」

そんなことを話しながら見廻りを続けると。

魔物の気配がした。

その場に行くと思魔が百体ぐらいいた。

「こんなに出るのか？悪魔は。」

「こんな事は初めてだよ。」

「無駄口を叩くな行くぞ」

そう言って刹那は突っ込んで行った。

「はあ、行くぞシャル。」

リオンもシャルティエを出して刹那の後を追った。

龍宮は遠距離から銃をうち、刹那は

「神鳴流奥義、百花繚乱」

確実に回りの悪魔を倒していた。

しばらくして回りの悪魔を倒し尽くした龍宮と刹那は合流した。

「リオンは？」

「あっちだ！」

走ってリオンの元に向かう二人。
しかしそこでは凄い事が起こっていた。

「魔神剣」

剣圧が飛ぶ

「幻影刃、幻影回歸」

一瞬にして敵の後ろに回り込み斬りつける

「粉塵列破衝」

剣を擦り火花を散らす

「終わりだ塵も残さん、浄破滅衝炎」
剣から黒い炎が出て敵を浄化する

「……闇の炎に抱かれて消える。」

圧倒的な強さで悪魔を葬り去っている。

「何て言う強さだ。」

龍宮はそう言つて刹那を見た。

刹那は一心不乱にリオンを見ていた。

そうしている間にリオンは、すべての悪魔を倒していた。

「お疲れ。シャル。」

『坊っちゃんもお疲れ様です。』

「ふん、僕は疲れてなどいない。」

『まあまあ坊っちゃん、久々に戦ったんですから今日は休ましましょう。』

「そうだぞリオン、しっかり休め。」

龍宮が草むらからでてそういつてきた。

「まあいい。帰るぞ。」

そうして家に帰った三人。

「どうした刹那、ずっと喋ってないじゃないか？」

「リオンあの、わ、私に剣を教えてくれないか？」

刹那がそう言ってきた。

「・・・・・・・・」

「やっぱりダメか？」

「・・・・・・・・明日から早く起きろ。朝早くにやるぞ。」

「ありがとう。」

「まあいい、だが厳しくやるぞ。」

それからリオンの日課に朝の修行が加わった。

初めて会うやつら（後書き）

感想等を書いてくれると嬉しいです

エヴァとの出会い（前書き）

今日の名言

生きているのなら神様さえ殺して見せる

《両儀式》

私もか？

《エヴァ》

多分な

《リオン》

エヴァとの出会い

朝、リオンと刹那は、寮から出ていき世界樹広場の前に来ていた。

「よし、じゃあお前の实力を見よう。全力で来い。」

リオンの態度に起こったのか？

「行きます。怪我しても知りませんよ。」

それから30分ほど打ち合い、

「分かった。もういい。」

「な、何故だ？」

ようやく調子が出てきたのに。

「お前の实力が分かったからだ。それに早くしなければ学校が始まってしまう。」

時計を見るともう八時だった。

始める前のランニングが長く時間がなくなっていたのだ。

「じゃあ、急いで帰って学校に行くぞ。」

そう言って二人は走り出した。

そして朝のHR

リオンと刹那は静かに席に座っているが、周りはまだうるさかった。

（シャルなみの煩ささだな。）

そんなことを考えている内に、ネギが入ってきた。

「き、起立。 気をつけ」

「あ……ども……」

「礼」

「「「「「おはようございます。」「「「「「

「おはようございます。」

「着席。」

朝の挨拶が終わった。
まったく子どもじゃないのに。

一時間目は英語らしい。
何とかこの世界の字は読めるので普通に授業は受けれる。

ガヤガヤ

周りが騒がしかった。
耳を傾け話を聞くと、
アスナが保健体育以外バカだと言ったことが分かった。

そしてアスナがネギを掴むとネギが

「ハ、ハ、ハックション！」

くしゃみをした。

その瞬間アスナの服が脱げ

「／／／／」

「リオン見るな！」

刹那に目を塞がれた。

「リオンくんは見てないよね。」

まき絵にそう声をかけられた。

「ああ見てない。瞬間刹那に手で塞がれたからな。」

そう言うときまき絵は安心した様に離れて行く。

「やはり女だらけの場所だから疑われるのか？」

刹那に聞くと

「さあ、貴方は鈍感ですね。」

そう言われてしまった。

その後僕は授業を受けるのが面倒だったので屋上に行った。

『やっぱり外の空気はいいですね。坊っちゃん。』

「シャル、学校じゃ喋るなど言っただろう。誰に聞かれるか分からん」

そう言っただけで会話を終わらせようとしたのだが、

「ほう、聞かれるとどうなるのだ。」

「！誰だ！」

見ると金髪の少女がいた。

「エヴァンジェリンAKマクダウェルか？」

「そうだ。お前から微量だが力を感じる。だからついてきたのさ。」

「そうか。」

「で？何が聞かれると困るんだ？」

「ふん！お前には関係ない。」

『坊っちゃんもしかしてこの人声が聞こえるんじゃないですか？』

「よく分かんが聞こえるぞ。それがどうかしたか？」

『やった！坊っちゃんあの人達以外にも僕の声聞いてくれる人がいました。』

「シャル少し静かにしろ。」

僕が一声そう言うとシャルは静かになった。

「貴様が何者なのか説明してもらおうか。」

「何故だ？」

「私が興味を持ったからさ」

それから僕達はエヴァの家に連れていかれた

エヴァの家に着き僕は抵抗する事を諦め説明をする

「フムそうか。」

「話は終わりだ。じゃあな！」

僕はそう言って帰ろうとするが、

「まあ待て、お前魔法を習う気はないか？」

「なぜ僕が」

「お前には魔力を感じるからな。それに、こちらでは魔法が使えた方がいろいろ楽だと思うが？」

なるほど、と僕は思ってしまった

「誰にだ。」

「私だ。それにお前が気に入ったからな。」

「……考えておく。」

そう言っただけで僕は帰った。

「リオン、どこに行っていた!」

刹那が聞いてきた。

「まったく学校もサボって。」

僕はエヴァの所に行っていた事を話した。

「今度からちゃんと話してから行ってください。」

「分かった、気を付ける。」

「ならいいです。では晩御飯の用意をしてください。」

「……………は？」

「昨日龍宮と話して決めたんです。家事はすべてリオンに任せます。」

「洗濯もか？」

「はいもちろん。」

「ふざけるなあ！貴様らそこになおれえ。」

それから僕は、二人に説教をして洗濯だけは二人にやらせる事にした。

忘れ物（前書き）

お気に入り登録してくれる人がいるのは嬉しいですね

今日の名言

シロウ、貴方を愛しています

《F a t e セイバー》

……マリアン

《リオン・マグナス》

何をしているんだ？

《落ち込んでいる坊っちゃんを慰めようとしているエヴァ》

忘れ物

あれから2日がたった。

その2日間何していたかと言つと

刹那との剣の修行

家事

夜の見回り

シャルの手入れ

プリンを食べる。

まあこんな事をやっていた。

だからあいつが言っていた事をすっかり忘れてしまっていた。

そのせいで今こんな事になってしまった。

「で？弟子入りの件の返答は？」

「……………」

僕はすっかり忘れていた。

「その顔は忘れていたな！」

「ウツ！悪い。忘れていた。」

『坊っちゃんが素直に謝ってる！』

僕はシャルのコアクリスタルに爪を立てて黙らした。

「ふん！やはりな。そんなことだろうと思ったよ。だからな、茶々丸つれてけ。」

「はいマスター。」

ガシッ

僕は両手を持たれ動けない。

「待て、僕をどこに連れていく気だ？」

「私の家だ。」

そう言って僕は有無を言わず連れていかれた。

エヴァの家

「着いたぞ。」

「何の样だ。急に連れてきて。」

「これば分かる。着いてこい。」

そして家の奥に入って行くと。

ミニチュアの家があつた。

「何だこれは？」

「見れば分かる。先に行くから早く来いよ。」

そう言つてエヴァはミニチュアの家近づくと。

ヒュン！

消えた。

「マスターはこの中に居ます。近づくと入れますので早く来てくだ
さいね。」

ヒュン！

茶々丸も消えた。

「はあ、行くかシャル。」

『そうですね、行きましょうか。』

そうして僕達（一人と一本）も入って行った。「ようこそ我が別荘へ。」

「凄い。」

『ビンの中とは思えません。』

「フッフォンそうだろ！」

「で、何の様なんだ？ただこれを見たかっただけじゃないだろ。」

「お前はまだ魔法を見たことなさそうだからな見してやろうと思うて。ここなら今の私でも魔法が使えるからな。」

「ふん！そうか。なら見してくれ。」

「行くぞ、リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

詠唱を開始した。

「闇の精霊29柱、」

エヴァの周りに29個の光が浮く。

「魔法の射手連弾、闇の29矢」

それら全てが放たれる。

「どうだ、凄いだろう。」

「ああ、今見て思ったよ。僕にも教えてくれ。」

「ニヤリ！」そうか教えてやらんこともないがただじゃあな。」

「何が目的だ？」

「流石だ、話が早い。何簡単なことだよ。私と契約してもらっ。」

「契約？」

「ああ、お前には私のミニステル・マギになって貰うだけだ。」

「ミニステル・マギ？」

「要は私が詠唱中は隙ができるだろう。その間守って欲しいんだよ。」

「いいだろう。」

「では、目をつむれ。」

僕は目を瞑った。

すると甘い香りが……

「?????」

驚き目を開けると近くにエヴァの顔があった。

「……／／／」

「なんだ？ 以外とうぶなんだな、顔が赤いぞ。」

「／／／うつ、うるさい。／／／」

「フフ、まあいいこれで契約は終了だ。次に始動キーの設定だな。」

「始動キー？」

「私が詠唱する前に言った言葉がそうだ。」

「分かった。それじゃあそうだな……」

『坊っちゃん僕の名前を入れてくださいよ。』

「分かったよシャル。……じゃあ、シャル・シエル・シャルテ
イエ・シャルシエラ。これでいい。」

「ではそれで始動キーの設定は終わりだ。」

「今日はもう帰っていいか？」

「フフ、ここは1日経たないと出れないんだよ。だが安心しろ。ここでの1日は外では一時間だからな。」

それから1日中魔法の練習をしていた。

刹那の部屋

「ただいま。」

「お帰り。どうしたやつれてるぞ。」

「ちょっとな。悪いが僕は寝る。晩御飯は冷蔵庫にあるもので済ましてくれ。」

「「あ、ああ。」」

そう言っ僕は自分の部屋に戻って行った。

番外編 休日（前書き）

本編の合間の日常風景

今日の名言

僕は……過去を断ち切る

《リオン（ジューダス）》

……どんな過去があるんだ。

《聴き手エヴァ》

知りたいんですか？

《ソーディアン・シャルティエ》

番外編 休日

今日は休み

龍宮と刹那は朝早くから少し出かけている

と言うわけなので1日中、本を読もうと思っていたのだが、

こいつは……

「リオン買い物に行くぞ！」

「何故だ？」

「お前の服装に納得がいかん！」

「どこが！と言うかお前にそんな事を言われる筋合いはない！僕がどんな服を着ようが僕の勝手だろう！」

「うるさい私はお前の師匠だぞ、言う事を聞け！」

「マ、マスターいきなり朝に押し掛けてそれはないかと。」

「もう8時だぞ!」

「他のクラスメイトはまだ寝ている人も居ます。」

「それよりお前この学園から出れないんじゃないのか?」

「大丈夫だ!学園の中に服屋はある。」

「しかしマスター、まだ服屋は開いてません。」

確かにまだ開いていないだろう。

「仕方がない、なら午後から行くぞ。予定開けとくがいい。」

そう言って二人は帰って行った

『大変ですな坊っちゃん?』

「ああ、」

そうして僕は午後になるまで落ち着いて読書をしようとしたのだが、帰ってきた刹那に捕まり修行に付き合わされた。

午後

僕はエヴァの家に向かった。

「行くぞ！」

そう言っ腕を引つ張られる

「おい、腕を引つ張るな！」

「まあまあオンさん落ち着いて、マスターも嬉しいんですよ。人とあまり出掛けないので。」

「ふん！だからと言って毎回これじゃあ気が休まらん。……だが今日ぐらいは付き合ってやるさ。／＼／＼」

『坊っちゃんもあまり他人と買い物に行きませんでしたからね。』

「そうなんですか。」

「シャル、余計なことを言っな！」

そう言っエヴァに引つ張られて行く

「リオンさん、マスターの願いに付き合っていただきありがとうございます。」

そう言ったのは聞こえなかった。

店内

「／／エヴァ……貴様……」

「おお、似合っているぞリオン」

『坊っちゃん……』

「僕に女物を着せるな！男物を選べ！」

「似合うと思うのだが。」

「普段着だぞ！スカートなんかはけるか（くそ！何で僕がこんな格好を、）」

リオン今スカートをはき髪をピンで止めている。

「じゃあこっちは？」

またスカートを持っている

「もう帰してくれ。」

それから二時間付き合わされた。

（つ、疲れた。）

「楽しかったなあリオンのスカート姿。」

「マスター結局買いませんでしたね。」

「ん？まあいいんだよ。ただ遊びたかっただけだしな。」

エヴァはそう言っているきだした。

（そうか、あんな性格だから友人と遊ぶ事がなくて寂しかったんだな。）

エヴァ「どうした？リオン」

いつの間にか止まっていたらしい。エヴァが声をかけてくる。

「今度だ！」

「？」

「今度の休みをあけておけ。」

「何でだ？」

「今日買えなかった服を買いに行くんだ！付き合え。」

「……／／ああ！空けとくよ」

そうして僕たちは帰って行った

（たまにはこんな休日も悪くない。）

『（素直じゃないですね）』

そうして休日は過ぎていった

桜通りの魔法使い（前書き）

今日の名言

俺が……俺たちが、ガンダムだ！！

《刹那・F・セイエイ》

ベツ、別に甘いものなんて好きじゃないんだからな！！

《甘いもの好きリオン》

ならこのプリンは私が貰う

《リオンをからかって遊ぶエヴァ》

桜通りの魔法使い

エヴァの従者になってから慌ただしかった。

まず、高校生と場所の取り合いでドッジボールをしたり、テストがありその結果が悪いとネギが止めなければならなくなると言うことなのでクラス全体で勉強したりした。

それからネギが正式な教員になってテストでトップだったのでパーティーをやったりした。

それから数日たち、

エヴァの家

「もうすぐ私の封印を解く。」

「そうか。」

「なんだそのリアクションは！のりがわるいぞ貴様。」

「別に、ただ最近その話ばかりで聞きあきた。」

「仕方ないだろ！15年間も学校に通っているのだぞ。あいつの父親のせいで。」

「それで今晩は満月だったか？」

「ああ、また血を吸いに行く。」

「まあ、ネギを相手にするときに呼べ。」

「何を言っている？」

「だから、「今日は多分来るぞ。そうしかけるからな。」はあ、分かったよマスター。」

「じゃあ夜に来るからな。」

そう言って僕は部屋に帰って行った。

リオンの部屋

「なぜ貴様がここで寝ている？」

『そうですよ、坊っちゃんの布団で寝ていいのは僕だけですよ！』

「短い再開だったな。」

『ま、待って坊っちゃん。冗談、冗談ですって。』

「まあいい、おい起きろ刹那。」

「zzzz」

「起きろ刹那!!」

「zzz・・・は!」

「起きたか。」

「なぜあなたが此処に?」

「ここが僕の部屋だからだ。」

「あつ!私貴方に用事があつたんです。」

「なんだ?」

「最近夜は物騒なので見回りを強化することにしてばらばらに回ることになりました。」

「分かった。(好都合だ。)」

それから僕は夜まで刹那と剣の修行をした。夜校舎の上

「暇だな。」

『暇ですね。』

「そう思ってプリンを持ってきました。」

「本当か！食べる！」

そんなやり取りをしながらエヴァを待っていると。

『もうすぐそちに着く。坊やがいるから用意をしておけ。』

「了解マスター（エヴァ）。」「」

そう言ってすぐ来た。

エヴァのマントが飛ばされる。

「やるじゃないか先生。」

「これで僕の勝ちですね、約束通り教えてもらいますよ何でこんなことしたのかそれに・・・お父さんのことも」

「お前の親父・・・すなわち・・・《サウザントマスター》のことか、フフ」

ネギの顔に動揺が走る。

「と、とにかく！！魔力もなくマントも触媒もないあなたに勝ち目はないですよ！！素直に」

「・・・これで勝ったつもりなのか？」

スッ

ズシャン

二つの影が来た。

「さあ、お前の得意な呪文を唱えてみるがいい。」

「（新手？仲間がいたのか。仕方ない三人まとめて）ラス・テル・マ・スキル・・・風の精霊11人縛鎖となりて敵を捕まえる」

「ふ・・・」

スッ

影が一人動いた。

「サギ、あたっあたた？えっあれ！？き、きみはウチのクラスの・・・」

ペコリ

お辞儀をする茶々丸

エヴァ「改めて紹介しよう私のパートナー3 - A出席番号10番の茶々丸とリオンだ。二人とも私のミニステル・マギだ」

「えっ、なっ、ええっ！茶々丸さんとリオンさんがあなたのパートナー？」

「そうだ、パートナーのいないお前ではわたしには勝てんぞ。」

「なつ、パートナーくらいなくなつて風の精霊11人・・・」

スッペシ！

「風の、」

ベシ！

（なつ）

「驚いたか、元々魔法使いの従者とは戦いのための道具だ。我々魔法使いは呪文詠唱中完全に無防備となり攻撃を受ければ呪文は完成しない。そこを盾となり剣となつて守護するのが従者の本来の使命だ。つまり、パートナーのいないお前は我々三人には勝てないと言うことさ。」

「（そそそんな）知らなかつたよ。」

「茶々丸」

コクリ

「申し訳ありませんネギ先生マスターの命令ですので。」

首を閉められるネギ

「ふふふようやくこの日が来たか、お前が学園に来てから今日という日を待ちわびていたぞ。お前が学園に来ると聞いてからの半年間ひよっこ魔法使いのお前に対抗できる力をつけるため仲間を増やし危険を冒してまで学園生徒の血を集めた甲斐があった。これで奴が私にかけた呪いも解ける。」

「あまり僕は必要なさそうだな。茶々丸僕は帰るぞ。」

「どうぞお気を付けて。」

「帰っちゃうんですか？」

「ああ、お前が捕まった時点で僕がいる意味がないからな。じゃあなエヴァ。って聞いてないか。」

そうして僕は帰って行った。

そしてリオンが帰ってからアスナが来てエヴァの邪魔をしたのを知ったのは次の日の学校だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5378n/>

ネギまin坊っちゃん

2010年10月9日04時32分発行